

お茶うけ 第26話

『棧瓦(さんがわら)』の考案

近江商人の本拠の一つである滋賀県近江八幡市は、「八幡瓦」の産地でもあります。その瓦工場の跡に、最近建設された「かわらミュージアム」で、日本の瓦技術は飛鳥時代から今まで約1500年の永い歴史があることを知りました。さらに、現在近畿より東の地域に普及している使い勝手の良い『棧瓦(さんがわら)』は、約500年前の江戸時代に大津の瓦職人が考案したものとされます。『棧瓦』開発を物語風に辿ってみました。

第4代将軍徳川家綱の時代(1651～1680年)のことである。大津の瓦職人西村半兵衛の家を江戸の商人が訪れた。この商人は商売で京都へ行く途中、東海道を少し外れて立ち寄り、江戸の話をも土産に茶を馳走になることにしていた。「いや、江戸は人が増え、家もびっしり建て賑やかだが、火事が多くて安心して住めやしない。なにしろ屋根は草葺きかせいぜい板葺きだから、どっかで火が出れば飛び火で直ぐ燃え移ってしまい手が付けられない。ご老中様の中には、町方の屋根も全て瓦にしてしまえという威勢のよい方もいるそうだが、何しろ「本瓦葺」はあの重さだろ。屋根だけ葺き代えるわけにいかず、家の柱から造作を始めからやり直さなきゃならない。なんとか軽い瓦ができないものかねえ、半兵衛さん」と、一しきり話して立って行った。



瓦の技術は、仏教とともに飛鳥時代(538年)に、百済の瓦工・麻奈父奴等4人によって伝えられた。それが『本瓦』で、後に『棧瓦』が開発されるまで、約1000年もの間、日本の瓦屋根は全て『本瓦葺』であった。「本瓦葺」は2種類の瓦を用い、「平瓦」を並べた上に、「丸瓦」を重ねて葺いた。この「本瓦葺」は現在も沖縄から瀬戸内海沿岸にかけて普及している。〔イラスト左上図参照〕
『本瓦葺』の瓦は、「平瓦」も「丸瓦」も、土を練って桶型に巻き付けて円筒を作り、それぞれ4枚、2枚に割って瓦の形にし、乾燥させてから焼き上げた。この桶型に巻き付けるのに熟練を要したので、瓦500万枚を要したという平安京(710年～)の造成時には、「平瓦」1枚分の粘土を成形台に載せて叩いて形を作る1枚づくりが考案されたが、「平瓦」と「丸瓦」の2種類を使う基本構成に変わりなかった。

半兵衛は、より軽い瓦を考案する中に、「本瓦葺」の「丸瓦」の役目は、雨よけと重しであると気付いた。隣り合う「平瓦」の間を狭くすれば、雨よけの「丸瓦」を小型にでき、さらに「平瓦」同士を重ね合わせれば、重しの役目も果たすと気付いた。何度も図面を引き直して、1枚の瓦で、「平瓦」と「丸瓦」の2枚の役目を果たす、今の『棧瓦』の原形が出来上がった。〔イラスト右上図参照〕
しかし、この複雑な形の瓦を、従来の捏ねた粘土を成形台の上で叩いて作る方法では、成形に熟練を要し量産向きでない。半兵衛は作り方を工夫する中に、織田信長が安土城の天守閣(1579年完成)の瓦を作らせた明の瓦工・一観が使った、木製の瓦型に粘土を埋め込んで瓦を成形するという新技術を思い出し、『棧瓦』の木型を設計した。

1674年に、あの江戸の商人が西村の家に立ち寄った。半兵衛は、商人を「今日は三井寺に参詣しないか」と誘って、本堂に詣でた後、万徳院の玄関に連れていった。玄関の屋根の不思議な形の瓦に気づいた商人は、「これは？」と半兵衛を振り返った。半兵衛は笑みを浮かべて、「出来たんだよ。軽い瓦が」と玄関脇から、1枚の瓦を取り出して見せた。『棧瓦』の誕生であった。
1720年、たび重なる江戸の大火に手を焼いた徳川幕府は、町中の家を瓦葺にするよう積極的に奨励した。この軽い『棧瓦』の発明が、瓦葺の普及に大きい役割を果たしたと言われている。

以上

参考書類

- 「かわらミュージアムのご案内」 近江八幡市立かわらミュージアム刊
- 「物語/ものの建築史 和瓦のはなし」
山田幸一監修 藤原勉・渡辺宏著 鹿島出版会刊
- 「日本の民家」 川島宙次著 講談社現代新書